ギアナ三国におけるハンセン病の捉えられ方と同病者の扱われ方：文献綜述

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): Leprosy, Hansen's disease, Leprosarium, Three Guianas, Guyana, Suriname, French Guiana, Literature review 作成者: 若林, 佳史 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6934

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ギアナ三国におけるハンセン病の捉えられ方と同病者の扱われ方：文献綜述

若林　佳史*

要　　約

ハンセン病に関して今後どのような心理社会研究また健康教育研究を推し進めればよいか，それを探るため，ギアナ三国でこれまでに行われてきた同領域での調査や研究を概観した。

その結果，病者の生活状況や食物規定や葬り方の変化に焦点を合わせた調査や研究，またこれらを念頭に置いての病者らの心理社会面や健康教育面に焦点を合わせた基礎的な調査や研究が進められるべきと考えられた。

Ⅰ．はじめに

ハンセン病に関して今後どのような心理社会研究また健康教育研究を推し進めればよいか，それを探るため，これまで中国，南アジア，東部アフリカ，西部アフリカ，中部・南部アフリカで行われてきた同領域での調査や研究を概観し（若林 2013[1-1]，若林 2014[1-2]，若林 2016[1-3]，若林 2017[1-4]，若林 2018[1-5]），そうした調査や研究のほとんど行われていない北部アフリカに関しては，ハンセン病がどのように見られ，また同病者がどのように扱われてきたのか，それを略記した（若林 2019[1-6]）。本稿では，これまで同様，ギアナ三国で行われてきた同領域での調査や研究を概観するつもりでいた。しかしそれらを扱った文献はほとんどないことが判明した。そこで本稿では，北部アフリカ同様，同病がどのように見られ，また同病者がどのように扱われてきたのか，それを中心に略記することにする。

ここで，ギアナとは，南米北東部の，地理的な観点からいえば，北西をオリノコ川，北東を大西洋，東および南をアマゾン川とその支流ネグロ川によって囲まれ，国でいえば，ガイアナ共和国（以下，ガイアナ）とスリナム共和国（同，スリナム）とフランス領ギアナの全域，そしてベネズエラ・ボリバル共和国（同，ベネズエラ）とブラジル連邦共和国（同，ブラジル）のそれぞれ一部が含まれる一画のことをいう。このうち，ガイアナとスリナムとフランス領ギアナは，フランス領ギアナはフランスの海外県であって国ではないが，まとめてギアナ三国（the Three Guianas）と呼ばれる。この三国のうち，ガイアナは旧イギリス領，スリナムは旧オランダ領で，同三国は同じ南米にあっても，スペイン語やポルトガル語が話される他国とは異なった趣を呈している。

ところで，カリブ海の島々は，歴史的・政治的な観点から，少々正確さを欠く言い方となってしまうが，かつてイギリスの植民地ないし領土で

*大妻女子大学　社会情報学部

（UNEP 2006[1-7]）

図 1　Wider Caribbean Region

あった（ないし，現在も，である）地域，同様にして，オランダの植民地ないし領土であった（である）地域，フランスの植民地ないし領土であった（である）地域，そしてスペインの植民地ないし領土であった地域に分けられる（正確には，さらに，かつてはデンマーク，現在はアメリカ合衆国の領土となっている島々もある）。言語的な観点からいえば，それぞれ，英語圏，オランダ語圏，フランス語圏，スペイン語圏ということになる。ガイアナとスリナムとフランス領ギアナは，それぞれ，この英語圏，オランダ語圏，フランス語圏の島々と一緒に扱われることが少なくなく，スリナムに至っては，カリブ海のオランダ領の島々と統合され，一つの植民地となっていたことさえもある。こうしたことから，カリブ海の島々と，ギアナ三国を含む周辺諸国諸地域とをまとめ，Wider Caribbean Region や Extended Caribbean Region や Greater Caribbean Region[*1-1)] と呼ぶことがある（図 1；UNEP 2006[1-7]）――本稿では，カリブ海地域と呼ぶことにする。ただし，ヨーロッパ諸国の植民地となり，アフリカ人奴隷らを労働力として砂糖などが生産されたという共通点はあるものの，島や地域によって言語が異なり，また今日に至る経緯が異なり，さらにかつては砂糖の生産地として競争関係にあり，そのうえ独立国家とヨーロッパ諸国の海外領土や自治領などとが入り混じっており，カリブ共同体（CARICOM）やカリブ諸国連合（ACS）といった機構もあることにはあるが，カリブ海地域としてまとまっているわけではない。

ここでカリブ海地域全体の植民地時代の歴史を，きわめて簡単にではあるが，まとめておきたいと思う。同地域のハンセン病は，主に植民地時代にアフリカから連れてこられた人々とともに入ってきたが，それ以外にヨーロッパまたアジアから来た人々によっても持ち込まれた，というの

が歴史家の大方の見方となっているからである。

さてカリブ海地域にはもともと先住民が住んでいたが，16 世紀にはスペイン，17 世紀からはオランダ，そしてイギリス，フランスが開拓に乗り出した。当初は試行錯誤的な農園経営であったと推測されるが，やがて大勢のアフリカ人奴隷を用いて，大規模に，サトウキビの栽培と砂糖（粗糖）の生産，またコーヒーやカカオの木の栽培と同豆の収穫などを行うようになった。

奴隷は，主に，現在のセネガルからアンゴラに至る，アフリカの大西洋に面した地域，とりわけベニン湾に面した地域と，中部アフリカの西海岸地域から連れてこられた。言語という点でいえば，アカン語やエウェ語やフォン語，ヨルバ語やイボ語などが話される地域と，コンゴ語が話される地域ということになる。奴隷を積み込んだ船は南赤道海流に乗り南東貿易風を受け，ナタール付近からは，一部は，南米北東岸に沿って北西に流れるギアナ海流・カリブ海海流に乗ってカリブ海のジャマイカやキューバやサン・ドマングなどに，また一部は，ブラジル海岸に沿って南西に流れるブラジル海流に乗ってブラジル南東部のリオデジャネイロやアルゼンチンのブエノス・アイレスなどに向かった。

農園での奴隷の労働は過酷なもので，農園から脱走し，熱帯雨林の中で暮らし始めた奴隷たちもいた。彼らはマルーンと呼ばれ，一つの民族のように扱われる。彼らの文化や言語はアフリカのそれにより近いと推察されている。

しかし 19 世紀に入り，国によって早い遅いはあるが，奴隷貿易が廃止され，ついで奴隷制も廃止された。その結果，農園は労働力不足に陥り，中国，英領インド（以下，単にインドと記する），ジャワといったアジアから，あるいはヨーロッパやアフリカから多くの労働者が呼び寄せられた。こうしてギアナ三国はさまざまなルーツを持つ人々から構成されるにいたった。

Ⅱ．ギアナ三国におけるハンセン病の呼称ならびに同病者および療養所

本節ではギアナ三国におけるハンセン病の呼称，そしてハンセン病の歴史や同病者の居留地について，断片的にではあるが，概観していくことにする。直近の有病率などについては，しかるべき統計書を見ていただきたく思う。

なお同病の呼称だが，正確に言えば，ハンセン病と似た症状を示す別の疾患も同じ名称で呼ばれていた可能性があり，くれぐれも注意していただきたい。

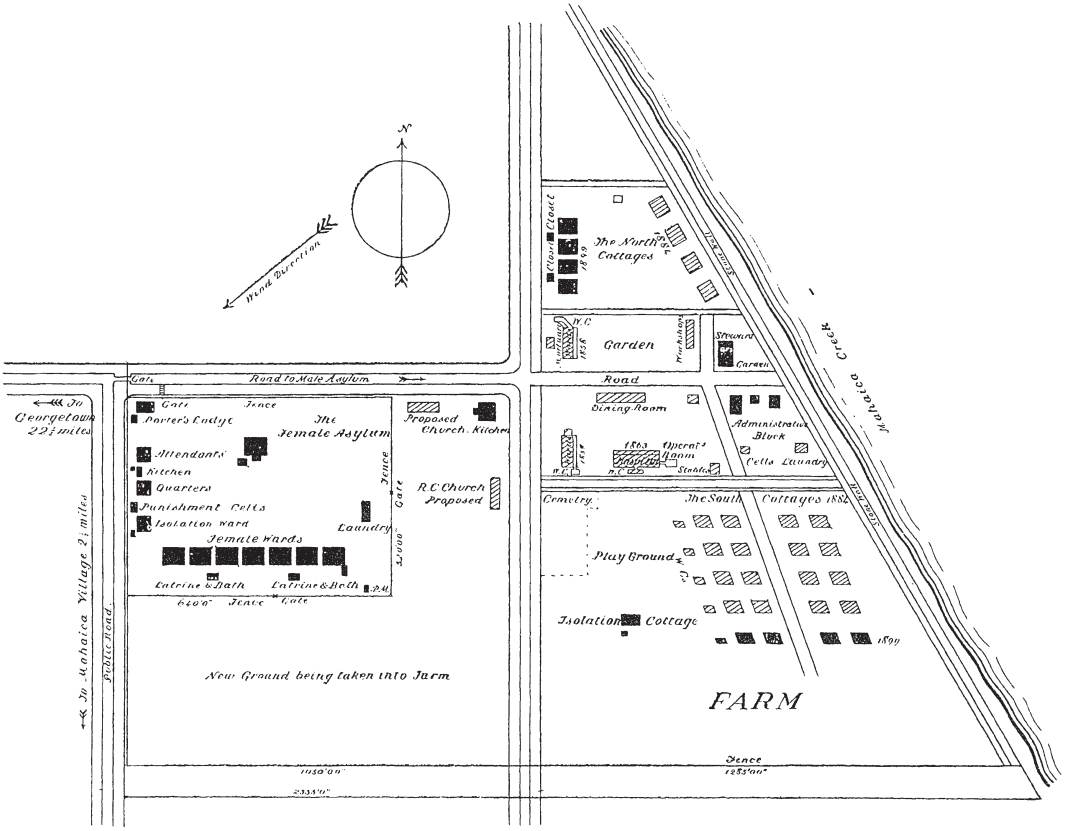
また病者が入れられた施設の呼称だが，少なくとも初めのころは医療の提供がなされず，収容されていただけと推察されるので，「収容所」あるいは「居留地」という語を用いる。ただし 19 世紀後半以降に関しては「療養所」という語を用いることもある。

さらに施設の開設年だが，もし新たに作るという場合，常識的に考えて，開設の決定から，実際に施設を作って病者を入所させるまで，少なくとも数か月以上はかかると思われ，そのためであろうか，施設の開設年は資料によって 1 年程度のずれがあることが少なくない。以下，とりあえず開設年を記していくが，そうしたことも念頭においていただきたい。

1．ガイアナ

17 世紀から 18 世紀にかけてオランダ人が入植を試み，エセキボ，デメララ，バービスに植民地を設けた。その後オランダとイギリスの間で奪ったり奪われたりの争いが続いたが，結局 1814 年からはイギリスに帰属することになり，1831 年にこれらの植民地が統合され「イギリス領ギアナ」(British Guiana)となった。1966年に独立を果たし，ガイアナ（Guyana）となった。

植民地時代，上述したようにサトウキビ農園・製糖工場などでアフリカ人奴隷が働かされた。1834 年に奴隷制が廃止されると，代わりの労働力としてまずヨーロッパ人が，また 1838 年からはインド人や中国人などが導入された。



(Neal 1900[2-1-16])

図２　マハイカ（Mahaica）居留地

現在，人口の多くは，労働者としてやってきたインド人の子孫（約４割），奴隷として連れてこられたアフリカ人の子孫（約３割），そしてムラートと呼ばれるアフリカ系とヨーロッパ系の混血（2割弱）によって占められる。そのほか先住民や，カリブ海地域から移り住んだポルトガル人の子孫なども少数いる。インド系とアフリカ系やヨーロッパ系との混血は少ないとされる。

英語が公用語となっているが，ガイアナ・クレオール語も広く用いられる。またインド系の人々の間ではヒンドゥスターニー語（ヒンディー語やウルドゥー語）も用いられるが，次第に話す人は少なくなってきているという。

そのクレオール語でハンセン病は *cocobay* という。この語はハンセン病に限らず，皮膚の腫物や疣や鱗屑性皮膚病などを指すときにも用いられる[*2-1)]ようであるが，それはともかく，いくつかの辞書（Cassidy & Le Page 1980[2-1-1]，Valls 1981[2-1-2]，Allsopp 1996[2-1-3]，Winer 2009[2-1-4]）や，語源に関する論考（Smith 2015[2-1-5]）を見る限り，ジャマイカ，ヴァージン諸島，セントクリストファー・ネイビス連邦，トリニダード・トバゴなど，カリブ海地域，とりわけ英語圏で広く用いられているらしい（綴りは，*cocobey*，*cucubay*，*cocabeh*，*kuckabeh* など数種類ある）。この語は，バハマ諸島のある島の名もしくは coco という魚の名に由来すると推測されたこと（Klingmüller 1930[2-1-6]）もあったが，今日ではアフリカ・ガーナで用いられるアカン語の一つトウィ Twi 語の *kokobé* ないし *kokobe* に由来するというのが定説となっている。Payne-

Jackson & Alleyne（2004）[2-1-7]は，ジャマイカで用いられるアフリカ由来の言葉の多くはこのトウィ語に由来し，もともとは他の言語を用いたアフリカ系の人々もトウィ語由来の語を用いるようになったと考えている。

なお西インド諸島で，joint evil と呼ばれる，趾が断離する病態があった。特発性指趾離断症（ainhum）とも考えられるが，Grainger（1802）[2-1-8]は “another species of leprosy” としている。

ガイアナ，広くはカリブ海地域のハンセン病は，植民地時代の19世紀に，Royal College of Physicians of London（1867）[2-1-9]や Milroy（1873）[2-1-10]，Hillis（1881）[2-1-11]や Tebb（1893）[2-1-12]，Abraham（1897）[2-1-13]や Vintras（1898）[2-1-14]などで取り上げられている。この時代，ヨーロッパ列強は熱帯で植民地を営む際に，とりわけハンセン病に強い関心の目を向け，同病によってそれぞれの植民地が崩壊することを，また同病が植民地から本国に入り込むことを恐れていたようである。

20世紀に入ってからも主に統計的な報告が多数ある（Neal 1900[2-1-15]，Moulton 1901[2-1-16]，Araujo 1924[2-1-17]，Rose 1929[2-1-18]，Rose 1931[2-1-19]，Rose 1933[2-1-20]，Muir 1942[2-1-21]，Nicholas 1955[2-1-22]，Rose 1989[2-1-23]，Alexander & Persaud 1997[2-1-24]，など）。また21世紀に入ってハンセン病史をまとめたものもある（Gampat 2015[2-1-25]）。今これらをもとに病者の居留地などについて略記する。

1796年　デメララにハンセン病者がいた（Moulton 1901）。

1831年　ポメルーン Pomeroon 川の河口近くに収容所を設置し，奴隷病者を収容。それ以前は奴隷病者は各農園で隔離された。

1832年　同収容所を近くの先住民地域駐屯地（post）に移す。

？　デメララ川上流，現在のハイドパーク辺りに収容所（Neal 1900）。

1850年頃　ジョージタウンに収容施設二つ。

1858年　マハイカ Mahaica クリーク河口近くに居留地開設。元兵舎を利用。ジョージタウンの施設の病者を移す。General Leper Asylum と呼ばれた。建物配置図は Neal（1900），Araujo（1924）参照。図2に Neal のものを示す。

1864年　同じ英領のトリニダードでハンセン病を患ったインド人労働者が年季終了前にインドに帰され始める。同時期に英領ギアナでも同様の措置がとられたと考えられ，Hillis（1881）には “proceeded to India” という表現がある。また Rose（1933）では，1907年から1931年にかけて185人が帰されたことになっている。ただし無事に帰れたか定かでない。

1871年　マザルニ Mazaruni 川とエセキボ Essequibo 川の合流部にあるカオウ Kaow 島に居留地を開設。ただし不明なことが多い。

1879年　マハイカ居留地で暴動。男性入所者の一部をカオウに移す。女性病者をジョージタウンの植民地病院に移す。

1882年　マハイカ居留地の数キロ東にゴーチュム Gorchum 居留地を開設し，植民地病院の女性病者を移す。

1884年　カオウ居留地閉鎖。入所者をマハイカに移す。

1900年　ゴーチュムの女性病者をマハイカに戻す。Neal の図では，西側のフェンスで囲まれた一画が女性地区。

1928年頃　マハイカには入所者約三百人がおり，2／3が男性。また1／3がインド人，残りが黒人と混血で，ポルトガル人や中国人も少数いるという（Rose 1929）。

1932年　モラビアの無原罪懐胎修道女会（Sisters of the Immaculate Conception）のシスターがマハイカの入所者のケアにあたる。その後1935年から1970年までは，最初は慈悲修道女会（Sisters of Mercy）のシスターが，ついで米国慈悲修道女会，特にボルチモア慈悲修道女会のシスターがこれにあたる（Menezes 2011[2-1-26]）。モラビアの修道女会の関与が短期間に終わったのは，第二次世界大戦直前のチェコスロバキアの緊迫した政治・社会状況と関係があるかもしれない。

2010年代前半　マハイカに住む者は数人になり，施設の維持管理はほとんどなされなくなった

ようである。

現在病者はジョージタウンのブリックダムのパームズにある Leprosy Control Clinic で治療を受ける。所長の Heather Morris-Wilson はハンセン病者の心理面にたびたび言及し，ハンセン病を患った人はほかの病気の人よりもうつ病の有病率が高いこと，またうつ病が病者の被排除感を強め，仕事や日常生活に影を落とし，社会とのかかわりを減らし，重度の場合は自殺を引き起こすことを指摘している。ただし病者の心理面や心理的ケアに取り組んだ文献は見当たらない。

2．スリナム

1650 年ないし 1651 年にイギリス人が入植を始めたが，まもなくオランダが占領し，1667 年のブレダ条約によってオランダの植民地となった。ナポレオン戦争の際にイギリスによって占領されたが，1815 年にオランダに返され，1854 年にはオランダ自治領となった。1975 年に独立を果たし，スリナムとなった。

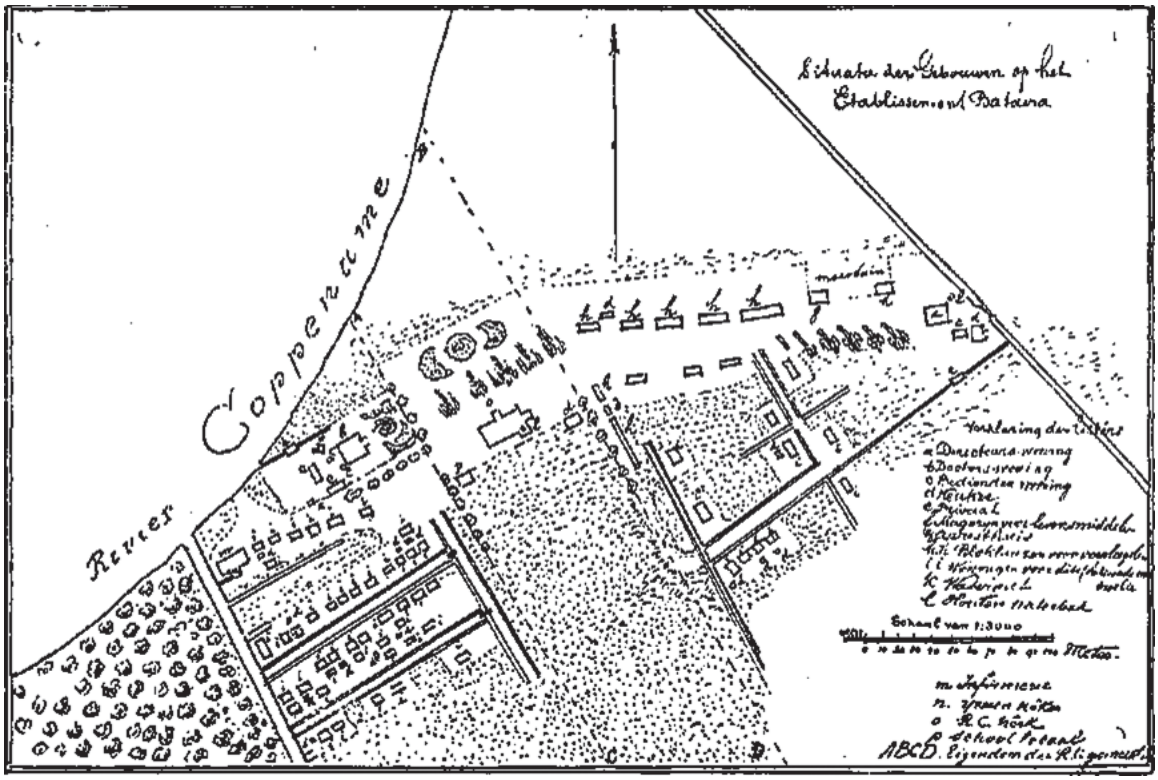
カリブ海地域の他地域と同様，アフリカ人奴隷が大規模農園で働かされた。1863 年に奴隷制が廃止されると，自由になった奴隷の多くは農園を離れ，都市部に移り住んだ。この主に都市部に住み着いたアフリカ系の人々とその混血の子孫はクレオールと呼ばれる。奴隷制廃止前から中国などから労働者が呼び寄せられていたが，廃止後は，インドから，次いでジャワ（当時のオランダ領東インド）から多数の労働者が呼び寄せられた。

ところで，15 世紀末にスペインとポルトガルでユダヤ教徒が追放され，その地に住んでいたユダヤ人はオランダやオスマン帝国やマグリブなどのほか，オランダの植民地であったスリナムにも，たとえば，一時期存在したオランダ領ブラジルを経由して移り住んだ。またドイツにいたユダヤ人も移住してきた。

現在，資料によって数値は若干異なるが，人口の多くは，ヒンドゥスタンと呼ばれるインド系（3 割），クレオール（3 割），ジャワ系（1 割 5 分）によって占められる。そのほか，マルーンや先住民，中国系やユダヤ系の人々なども少数いる。クレオールとマルーンを合わせ，アフリカ系スリナム人ないしアフロ・スリナム人という言い方もよくなされる。概して都市部ないし沿岸部にはクレオール，内陸部にはマルーンが住む。

オランダ語が公用語となっているが，英語を基盤としたクレオール語のスラナン語（スリナム語，タキタキ語ともいう）と，英語そのものも広く用いられる。そのほかヒンドゥスターニー語とジャワ語も，それぞれ中国系とジャワ系の人々の間で用いられる。さらにマルーンの間ではよりアフリカの言語に近い言語も用いられる。

このように多様なルーツをもつ人々から構成されているためか，スリナムにおいてハンセン病を意味する語は多いようで，Menke et al（2019）[2-2-1] は *boasie*，*gwasie*，*kokobe*，*kwenten*，*dyusiki*，*nengresiki*，*fatusiki*，*mangrisiki*，*takrusiki*，*tyinasiki*，*trefusiki*，*kordia*，*kohi*，*lepra*，*melaatsheid*，*Sar'at*，*ziekte van Hansen* と，17 もの言い方を挙げている。また Wilner（2007）[2-2-2] はスラナン語でハンセン病は *bwasi*，*gwasi*，*kokobe* というとしている。最初の二つ *boasie* ないし *bwasi* と *gwasie* ないし *gwasi* は同系統の語であろう。前者について，ガーナの Boasi という町の名に由来するという説（Menke et al 2019）もあるが，コンゴ語の *bwási* や *wâzi* や *bwazi*，あるいはコンゴ語の一つ（Ki)Ntandu 語の wáasi，さらに遡って原バントゥー Proto-Bantu 語の **-badi* に由来するだろうとする言語学者（Smith 2015[2-2-3]）の説のほうが説得力がある。*kokobe* はガイアナの項で述べた *cocobay* と同じだが，スラナン語では *c* は *k* となるため表記が異なる。Snelders（2017）[2-2-4] によれば，*boasie* はらい腫型ハンセン病，*kokobe* は類結核型ハンセン病を，また Wilner（2007）によれば，*kokobe* は手や足の指の変形した同病を指すようである。*kwenten* はガーナで用いられるアカン語の *kwata* に由来すると考えられている語（Menke et al 2019）。そのほか *siki* で終わる語が多いが，*siki* は「病気」を意味する英語の sick ないしオランダ語の ziek に由来する語。そして，*dyusiki*（*yu-siekie* と綴られたこともあったようである。Snelders 2017 参照）の *dyu* はユダヤ人（jew）



（Lens 1895[2-2-11]）

図３　バタビア（Batavia）居留地

の意で，結局「ユダヤ人の病気」の意，*nengresiki* の *nengre* は黒人（negro）の意で，結局「黒人の病気」ということになるが，Wilner（2007）によれば，*nengresiki* には「社会的・宗教的な規範ないしタブーの違反により起こる病気」という意味合いがあるらしい。また，Wekker（2006）[2-2-5] によれば，アフリカ系スリナム人は病気を，医術師（*datra*）にみてもらう *datra siki*――*Gado siki*（God's illness）ともいう――と，*bonu* という霊術師にみてもらう *nengre siki* にわけているという。こうしてみてくると *nengresiki* はハンセン病のみを指すのではなく，それを含む一群の病を指す語といえよう。次に進む。*takrusiki*（*takroe siki* と綴られることもあったようである）の *takru* は悪いの意で，結局「悪い病気」の意。Wilner（2007）は *takrusiki* を「癌の婉曲語」としているが，ハンセン病についても婉曲語として用いられたのであろう。*fatusiki* の *fatu* は肥えた（英語の fat）の意で，おそらくは「皮膚の盛り上がる病気」の意だろう。また *mangrisiki* の *mangri* は痩せ細った，骨ばったという意で，おそらくはそうした状態を示す病気の意だろう。ポルトガル語の magro（痩せた）に由来するかもしれない。*tyinasiki* は *tyina* の病気，*trefusiki* は *trefu* の病気という意味で，*tyina* と *trefu* については後で触れる。*kordia* と *kohi* はヒンドゥスターニー語に由来する語。*melaatsheid* はオランダ語である。ジャワで，ハンセン病は古ジャワ語で *wuḍug*，今日のジャワ語で *buḍug*（*bodok* や *buduk* とも表記する），あるいはインドの言葉を借り *kusta* や *kuta* などというが，スリナムのジャワ人の間でこれらの語に由来する語がかつて使われた可能性も否定できない。

ここで「ユダヤ人の病気」という言い方があることに注目すべきだろう。ハンセン病は黒人に

よって持ち込まれたという見方のほかに，ユダヤ人によって持ち込まれた，ないし広められたという見方もあったことが推察されるからである。古来，ハンセン病はユダヤ人と結びつけられることが度々あったが，スリナムでもそれが生じたということであろうか。もっとも実際にヨーロッパからユダヤ人が同病を持ち込んだ可能性も否定できない。

スリナムにおけるハンセン病史については，主に19世紀に書かれた一次史料に近いもの（たとえば，Schilling 1771[2-2-6], Stedman 1988[2-2-7], Kühn 1828[2-2-8], van Hasselaar 1835[2-2-9], Drognat-Landré 1869[2-2-10], Lens 1895[2-2-11]，Araujo 1924[2-1-17]，など）と，20世紀21世紀に入りそれらを駆使した論考（Cohen 1991[2-2-12]，Ten Hove 2003[2-2-13]，Menke et al 2007[2-2-14]，Menke et al 2009[2-2-15]，Menke et al 2010[2-2-16]，Menke et al 2011[2-2-17]，Snelders 2013[2-2-18]，Menke 2015[2-2-19]，Jagdew & Vernooji 2017[2-2-20]，Vernooji 2017[2-2-21]，Snelders 2017[2-2-4]，Snelders et al 2019[2-2-22]，Menke et al 2020[2-2-23]，など）とが，それぞれ少なからずある。とりわけSnelders（2017）は歴史的観点から，たとえば，遺伝か感染かを巡るオランダ本国と植民地の認識の違い，アフリカ系女性病者とオランダ人男性の性的関係，カトリックとプロテスタントのライバル関係，居留地における規律，アフリカ系スリナム人の民間医療などについて，さらにSnelders et al（2019）は，同じオランダの植民地であった西インド（スリナム）と東インドのハンセン病認識の違いについて高水準の考究を行っている。

また病者のライフヒストリーを写真付きで記したものもある（Spapens & Stads 2012[2-2-24]）。

これらの文献をもとに，ハンセン病史についてまとめる。

1761年　ハンセン病の症状のある奴隷が公道に出ることが禁じられる。ただし守られず。

1780年　ハンセン病の奴隷の販売が禁じられる。奴隷を公に販売もしくは賃貸する場合，その前に検査が必要であった。なお，それ以前より，奴隷船が到着した時，奴隷は医師によって検査された。

1790年　強制隔離を導入，ただし成文化は1830年。

1791年　サラマッカ川に隣接した未耕作地にヴォーゾーク Voorzorg 居留地を開設し，奴隷病者を収容。voor は事前，zorg は注意や懸念，両語がつながった voorzorg は予防や用心という意味。

1823年　コッペンナム Coppename 川の河口近くの旧大規模農園の敷地[*2-2)]にバタビア Batavia 居留地開設。建物配置図は Lens（1895），また配置の概念図は Menke et al（2020）参照。図3に Lens のものを示す。ヴォーゾーク居留地の病者を移し，同居留地閉鎖。植民地政府は，抵抗されることなく病者を移し，その後も居留地の秩序を保つため，オランダのローマ・カトリック教会と協力。同教会からすれば，スリナムにおける勢力拡大の足場と，オランダでの資金集めのための宣伝材料を得たことになる。入所者の大多数はアフリカ人奴隷で，裕福なヨーロッパ人（ユダヤ人を含む）は自宅で隔離されて暮らすことが可能だった。隔離は徹底せず，入所者は抜け出た。入所者に対する医療の提供はおおむね1850年代以降。

1863年　奴隷制廃止。

1880年代以降　バタビア居留地にインド人および中国人の病者も収容されるようになる。

1895年　パラマリボ近郊にマジェラ Majella 居留地開設。カトリック教会がケアに関与。入所者はカトリック信者であるか，カトリック教に改宗することが望まれた。「愛（ないし慈善）の修道女会（Zusters van Liefde）」のシスターが入所者のケアにあたる。

1896年　スリナム川に隣接して公立のグルート・シャティロン Groot-Chatillon 居留地開設。建物配置図は Araujo（1924）参照（Araujo はグルート・シャティロン居留地とベセスダ居留地を取り違えているので注意していただきたい）。バタビアから病者を移し，バタビア閉鎖。スリナムで新しく病者が見いだされた場合，そのうち，アフリカ系スリナム人や，キリス

ト教への改宗を望まないヒンドゥー教徒やイスラーム教徒のインド人やジャワ人らはこちらに送られた。また他の居留地から，規律を守らない病者も送られた。次第に入所者の過半がアジア系の人々によって占められるようになる。

1899年　グルート・シャティロン居留地の西隣にベセスダ Bethesda 居留地を開設。beth は家，hesda は慈悲もしくは栄光という意味で，イエスが病者らを癒やしたという池の名に由来しよう。プロテスタント教会が資金を提供し，モラビア宣教団が運営。同教会および同宣教団はこの居留地での活動を宣伝し，オランダのちには米国のプロテスタントから資金を調達。建物配置図は Araujo（1924）と Menke et al（2020）参照。

1905年　インド人病者（ほとんどはグルート・シャティロン居留地の入所者と推察される）30人をインド本国に帰す。

1911年　同じく33人をインド本国に帰す。

1929年　グルート・シャティロン居留地にいるジャワ人のほとんどをオランダ領東インドに帰す。

1933年　ベセスダ居留地をパラマリボ近くに移し，新ベセスダ居留地とする。

1964年　マジェラ居留地閉鎖。新ベセスダ居留地閉鎖。

1972年　強制隔離廃止，グルート・シャティロン居留地閉鎖。

？　エステル Esther 財団が，医学的には治癒したが身体障害を抱える者のためにパラマリボに施設を開設。

3．フランス領ギアナ

17世紀にフランス人が入植を試み，1643年に現在のカイエンヌの地に小規模な農園を設けた。1658年と1667年に，それぞれオランダ西インド会社とイギリスによって一帯が占領されるが，1667年ブレダ条約によりフランスに返された。また1809年にはブラジル駐留のポルトガル軍によって占領されるが，1815年にフランスに返された。この間入植も試みられたが，どの程度開発が進んだか，総じて資料に乏しく，はっきりしない。1848年に奴隷制が廃止されると，インドや中国などから労働者を呼び寄せた。すでに1794年と1797年に，フランス本国で政争に敗れた者が流される場とされていたが，1852年以降は，フランスから送られた囚人を用いての開発が行われることになった（1945年廃止）。1946年にフランスの海外県となった。

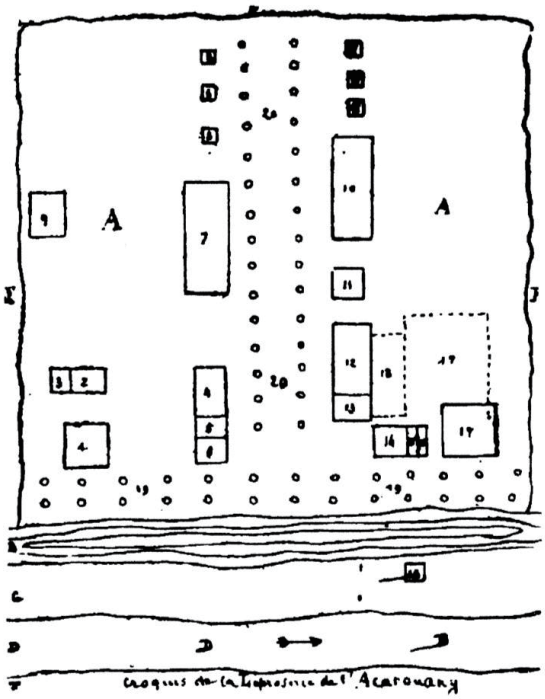
現在，人口の多くはクレオールとムラートによって占められるが，近隣諸国から職を求めて来た人，そして中国人やレバノン人，さらにはインドシナから移住してきたモン人，およびマルーンなども少数いる。

フランス語が公用語となっているが，フランス領ギアナ・クレオール語（フランス語ベースのクレオール語）も用いられる。そのほか，わずかながらヒンドゥスターニー語や中国語，モン語やハイチ・クレオール語なども用いられている可能性がある。

ハンセン病はかつてフランス語で *mal rouge de Cayenne*（カイエンヌの赤い病気）と呼ばれ，象病（*éléphantiasis*）と同じか否か論じられたこともあった（Société Royale de Médecine 1785[2-3-1]）。この語の由来に言及した論考は見当たらないが，フランス本国にこのような言い回しはなく，いっぽう西部アフリカには，若林（2017）が見てきたように，いくつかの言語で「赤い病気」という言い回しがある[*2-3)]ことからすれば，アフリカ人奴隷が用いていたそうした言い回しから *mal rouge* というフランス語の言い回しができた可能性が推察されよう。

なおハイチ・クレオール語では *lèp* あるいは *lalèp* という。

フランス領ギアナのハンセン病者の施設に関しては，古くは旅行記（Verschhr 1894[2-3-2]）があるものの，また一次史料ともいうべき各種の通達や手紙類が残されてはいるものの，それらを用いての論考がわずかで（Kermorgant 1905[2-3-3], Jeanselme & Tissier 1908[2-3-4], Thézé 1916[2-3-5], Floch 1951[2-3-6]），全容が掴みづらい。さらに，ハンセン病者の収容



A Terrains déboisés pouvant servir de jardins aux malades.
B Courbe d'élévation de terrain s'élevant brusquement de 17 mètres au-dessus du niveau moyen de la rivière Acaronany.
C Terrains contenant quelques jardins potagers servant aux sœurs et au médecin directeur, en partie inondé à la saison des pluies.
D Rivière Acaronany ayant environ 25 mètres de large.
E Savanes noyées.
F Forêt vierge.
1 Maison des sœurs.
2 Cuisine des malades.
3 Cuisine des sœurs.
4 Chapelle.
5 Sacristie.
6 Chambre de l'aumônier.
7 Hôpital des femmes (en planche 12 lits).
8 Carbets pouvant loger chacun 2 ou 3 lépreuses } le nombre peut en être augmenté suivant les besoins.
8 — — 2 ou 3 lépreux }
9 Cimetière.
10 Hôpital des hommes (en planche 12 lits).
11 Logement du personnel employé à la léproserie.
12 Magasin aux vivres.
13 Logement de l'agent comptable et jardin qui lui est réservé.
14 Boulangerie.
15 Chambre de boy.
16 Cuisine du médecin.
17 Maison à un étage pour le médecin directeur et jardin.
18 Fontaine et bassin d'eau potable.
19 Vaste allée de manguiers.
20 Allée large de manguiers et caféiers.

(Jeanselme & Tissier 1908[2-3-4])

図 4　アカルーアニー（Acarouany）居留地

地となった島々は，囚人の収容地としても伝染病罹患者の隔離地[*2-4]としても用いられ，その上，当然ながら，ハンセン病や伝染病を患う囚人もいたであろうから，話は非常に複雑である。本来ならば，ハンセン病者と囚人と伝染病者，これら三者の施設の変遷を関連付けて提示することが望まれるが，後二者の変遷の全容を把握することも困難であり，ここでは Marie-Odile et Phillippe（2015）[2-3-7] と Fougere（2018）[2-3-8] をもとにハンセン病者の施設の略記に止めざるをえない。誤りがあることを恐れている。

1776 年ないし 1777 年　カイエンヌ沖合の母島に居留地設立。黒人と白人の男性病者を収容。

1818 年　ハンセン病およびハンセン病療養所に関して行政命令（Ordonnance）が出される。

1823 年　母島の病者をクールー沖合のサリュー諸島のロワイヤル島に移す。同諸島はのちに囚人の収容地となる。また伝染病者の隔離地ともなる。

1833 年　アカルーアニー川沿いの高台に居留地を開設し，サリュー諸島の病者を移す。クルーニー聖ヨゼフ修道女会（Saint Joseph de Cluny）の会長 Mère Anne-Marie Javouhey の指示下に置かれ，Javouhey とシスターが世話をする。1840 年より行政の管理下に置かれる。同居留地の位置は Reclus（1895）[2-3-9]，建物配置図は Jeanselme & Tissier（1908），Araujo（1924）参照。図 4 に Jeanselme & Tissier のものを示す。

1840 年　母島に自由人（奴隷以外）のための居留地開設。アカルーアニーは黒人奴隷病者の居留地となる。

1848 年（？）　奴隷制の廃止とともに母島の居留地閉鎖。

19 世紀半ば（？）　ハンセン病の囚人がいた場合，サリュー諸島の悪魔島で隔離。

1865 ～ 1866 年　アカルーアニーの病者を東部オヤポク（Oyapock）湾に面したモンターニュ・ダルジャン（Montagne d'argent）に移す。

1868 年　モンターニュ・ダルジャン居留地を閉鎖。病者をカイエンヌ南のイエズス会が所有する敷地に移す。

1869 年　病者をアカルーアニーに移す。

1895 年　悪魔島の病者をマロニ川のサンルイ島に設けた施設に移す。いつまで存在したかは不明だが，1950 年頃に閉鎖か。1910 年の *Berichten uit de Heidenwereld*（Snelders 2017）によれば，「金（かね）と金（きん），酒とトランプカード，サイコロとアヘン」に満ちた場所と噂されたという。

1979 年　アカルーアニー療養所を閉鎖。

なおカイエンヌの西に lazaret de Larivot があったが，こちらは黄熱病やコレラといった伝染病の検疫施設ないし同病の恐れのある者の一時隔離施設と考えられる。

Ⅲ．ギアナ三国のハンセン病者の文化的・社会的環境

本節ではギアナ三国のハンセン病者がどのような文化的・社会的環境に置かれてきたか，それを見ていくことにする。当然ながら，病者の心理社会面はそれらから大きな影響を受けてきたと推察されよう。主に歴史家や文化人類学者，また現地にいた医師たちによる調査や研究や記述などを概観する。

1．植民地時代のハンセン病の病因論ならびに伝統的治療

まず，ハンセン病（同病と似た症状を示す病を含む）の原因はどのようなものと考えられたか，それについて概観する。もともとギアナ三国にハンセン病はなかったと考えられており，同三国における同病に関する考え方や慣習は，出身地であるアフリカやインド，中国やジャワ，そしてヨーロッパのそれらが土台にあると推察されよう。報告や記述には地域的偏りがあり，スリナムにおけるものが多くなっている。マルーンの力が強くアフリカ由来の考え方や慣習がよく残ったということなのか，単によく調べられたということなのか，わからない。

最初にタブー違反についてみていく。

先にハンセン病を意味する語として *tyinasiki*（*tyina* の病気）と *trefusiki*（*trefu* の病気）を挙げたが，前者の *tyina* はタブーや禁止という意味であ る。Herskovits（1931）[3-1-1] や Herskovits & Herskovits（1934）[3-1-2] によれば，これ（Herskovits の表記では *tchina*）はスリナムの内陸部に住むマルーンの一つサラマッカ人 Saramacca の用いる言葉だという。また Smith N（2015）[2-2-3] によれば，スラナン語で *kína*，*kina*，サラマッカ語で *kína*，*tyína*，*kjina*，*tchina* というようである（これらのサラマッカ語にはハンセン病という意味もある）。この語は，黄金海岸の言葉に由来するだろうという説（Smith RT 1956[3-1-3]）もあるが，コンゴ語の *kîna*[*3-1]) に由来するだろうとする言語学者の説（Smith N 2015）の方が説得力がある。残念ながらさらなる論考を見出すことができなかったが，何らかの禁止事項を侵すと病気（おそらくは皮膚病）になるという考え方がアフリカにあり，それがギアナに持ち込まれた可能性は高いと思われる。ただし禁止事項の内容はよくわからない。

次に，特に食のタブー，禁じられた食物，ないし食物規定についてみていきたいと思うが，その前に，アフリカにおける動物と病との関連付けについて触れておきたいと思う。もともとアフリカには「～の肉を食べるとハンセン病になる」という考え方があったからである（若林 2018[1-5] 参照）。地域ないし民族／部族によって対象となる動物は異なるが，たとえばブッシュバックやイランドやヤギなどを食べることは禁じられた。そして「その足が，足首のないハンセン病者のそれと似ているから」「その斑点や斑紋が，ハンセン病者のそれと似ているから」といった理由で説明された（アフリカの野生のヤギにはよく斑紋がある）。また赤色のものを食べることも禁じられ，「紅斑が悪化する」といった理由で説明された。あるいはナマズを食べることも禁じられたが，これに関しては，いま一つはっきりした理由がわからない。さらにヤモリのように，食べるどころか，触れただけでもハンセン病になるという考え方もあった。ヤモリの斑点や斑紋（アフリカのトカゲ類には斑点や斑紋がある）がハンセン病者のそれと似ているからなのか，尻尾が離脱するさまが同病者の指や爪先などが離脱するさまと似ているからなのか，また離脱後の姿が似ているからなのか，いくつか理由が推察されるが，よくわからない。

一方，アフリカの各地では，ある血縁集団と特別な関係のある特定の動植物（トーテム）を食べることも禁じられ，もし食べた場合，病気になると考えられている[*3-2)]。トーテムとなる動物は集団によって，カバやサイ，ライオンやイランドといったように異なる。ここで，イランドが「ハンセン病の特徴と似ているから食べてはならない」と「トーテムの動物だから食べてはならない」の両方に入っているのは興味深い。

そのほかインド人やユダヤ人もそれぞれの食物規定（たとえば，水中に棲む，ヒレと鱗を持たない生物や，地を這う生物などを食べてはいけない）を持ち込んだと推察されるが，言葉の上で大きな影響を及ぼしたのはユダヤ人のそれであったと思われる。先にスリナムにおけるハンセン病を指す言葉として *trefusiki* を挙げたが，そのなかの *trefu*（*treef* などとも綴る）は，ヘブライ語の *trayf*（*terefah* などとも綴る）に由来する語だからである（同様に，清浄を意味するスラナン語の *kaseri* はヘブライ語のカシェル *kasher* に由来する）。Herskovits & Herskovits（1934）は，*trefu* は，ブラジルからスリナムに移り住んだユダヤ人の農園主ないし奴隷所有者が使っていた言葉から借用されたものと考えている。スリナムにおいて *trefu* は広くはタブー，狭くは食べてはならない動植物のことをいう。それは，たとえば，ウミガメやカニ，羊やヤギといったように個人によって異なり，父から子へと受け継がれるとされている。この食物規定に違反するとまず斑点もしくは湿疹といった軽い皮膚病が生ずるが，違反が改められない場合はハンセン病になると考えられているという（Herskovits & Herskovits 1934[3-1-2]，Herskovits & Herskovits 1936[3-1-4]）。こうした考えを信ずる者は多く，Lamp（1929）[3-1-5] はスリナム生まれのハンセン病者数百人にハンセン病の原因を何と考えるか直接尋ね，*treef* 違反が同病を生じさせた，あるいは同病にかかりやすくさせる素地を作った，と考える者が

75% いることを示している。

現在も *treef* に対する信仰は根強いようである。Menke et al（2019）[2-2-1] は，スリナムでハンセン病にかかり治癒した 30 名に，Lamp と同様，同病の原因を何と考えるか尋ね，*treef* という者が最多で，ついで他の病者からの感染という者，三番目にトーテム動物に対する悪行や winti という者，四番目に遺伝と考える者の順であることを示している。

乱暴な推測となってしまうが，次のように考えることができよう。すなわち，アフリカから特定の動植物を食べることを自ら禁じる人々が連れて来られた。彼らの一部はその慣習を *tyina* ないし *tchina*（コンゴ語由来の言葉）と呼んで守った。また一部はユダヤ人農園主らの言葉を借り，*trefu* ないし *treef*（ヘブライ語由来の言葉）と呼んで守った，あるいは農園主らはその慣習を *trefu* ないし *treef* と呼んで理解した。

次に伝統的治療についてみていきたいと思う。植民地時代，カリブ海地域のアフリカ人奴隷たちがどのような病にかかり，どのような医術を受けていたのか，それに関心がもたれ，多くの研究がなされている（たとえば，Kiple 1984[3-1-6]，Sheridan 1985[3-1-7]，Handler & Jacoby 1993[3-1-8]，Kiple & Ornelas 1996[3-1-9]，Handler 2000[3-1-10]，Bilby & Handler 2004[3-1-11]，Handler 2006[3-1-12]，De Barros 2004[3-1-13]，Groenendijk 2006[3-1-14]，Davis 2016[3-1-15]，Schiebinger 2017[3-1-16]，Senior 2018[3-1-17]，など）。そして，奴隷の病気に対する医学的手引書（たとえば，セントルシアで Grainger 1764[3-1-18]，セントビンセントで Collins 1803[3-1-19]）があったこと，農園主は病者に下剤など簡単な薬を与えたこと，大規模農園には病者を収容する sick house ないし hot house と呼ばれる小屋があったこと（Roberts 2013[3-1-20] によれば，病気の振りをする者を監禁するためにも使われたようである），医師が農園を訪れていたこと，また同じ奴隷の黒人治療者がいたこと，オベア *obeah* という呪術師が癒やしに関わっていたことなどが明らかになっている。

植民地時代のスリナムの場合，怪我をしたり心身不調を感じたりしたアフリカ人奴隷は，そうした黒人治療者（*dresiman*）から手当てしてもらったり，薬草をもらったりしたようである。また原因不明の場合は，その原因を探るため *lukuman* にみてもらい，もし何らかの霊や悪霊といったものが関係していると思われたならば，*bonuman* や *obiaman*，*duman* や *wisiman* といった術師からなんらかの呪術的手当てをしてもらったようである。ハンセン病の症状が現れた時もこのような対応がなされたと推察される。Snelders（2017）は，スリナムでは，そうした黒人治療者はハンセン病者に下剤を与え，汗を出させ，軟膏を塗り，健全な食餌を処方した，としている。確かな史料はないが，薬効成分を含む何らかの植物が与えられたことは確かであろう。また Snelders は，緑トカゲ（green lizard）の肉で作ったハンセン病の薬があったことも記している。この green lizard が何なのかよくはわからないが，トカゲの一種であるグリーンアノールやイグアナかもしれない [*3-3)]。先にアフリカでハンセン病とヤモリを結びつける考え方があったことを述べたが，これと何らかの関係があるかもしれない。

なおセントビンセントの医師 Collins（1803）もトカゲ（lizard）の肉を用いた治療が信じられていることを記し，毒蛇による治療がトカゲによるそれに置き換えられたのではないかと推察している。

そのほかインド人病者は，本国インドと同様に，肉食を避けたり，ニームなどの葉や種子の煎じ液や搾り汁の服用や患部への塗布を行った（若林 2014[1-2] 参照）と思われる。

2. 植民地時代のギアナ三国のヨーロッパ人の病因論と治療

植民地時代，ギアナ三国にいたヨーロッパ人たちはハンセン病をどのように見ていたのであろうか，また，どのような治療を行ったのであろうか，それを見ていきたいと思う。この時代にギアナ三国にいたヨーロッパ人でハンセン病者とかかわったのは，行政官，教会の司祭や牧師やシスター，医師，奴隷貿易船の船長・船員，そして農園主ないし農園支配人であったと考えられる。ここでは，

医師の見方を中心に略記する。

ところで，ヨーロッパにおいて，同病および同病に対する見方は，おおまかには次のような経緯をたどった。すなわち，中世ヨーロッパにおいてハンセン病は稀な病ではなかったが，17 世紀に入ると山間部などを除きほとんど見られなくなり，同病に対する関心は薄れた。しかし植民地を営むようになると，遅くとも 17 世紀終わり [*3-4] には植民地のアフリカ人奴隷の中からハンセン病を患う者が現れ始め，同病に対する関心ないし恐怖が再び高まった。同病と梅毒やイチゴ腫との関係，また同病の原因について，諸説入り乱れたが，白人以外の病気であると見なされ，19 世紀に入り，遺伝によるという説が声高に唱えられた。

しかし，ギアナ三国にいたヨーロッパ人の中には，ハンセン病の感染性を根強く唱える者もいた。その代表が，スリナムで 1840 年より医師として働いた Charles Landré とその息子 Charles Louis Drognat-Landré であった。彼らは 1864 年にヨーロッパに戻り，改めて感染説を主張した。Menke et al（2010）[2-2-16] は，この親子の主張が，アルマウェル・ハンセンによる 1873 年の原因菌の発見に貢献したと考えている。

病者と一緒にいてハンセン病になる白人もいればならない白人もいる，という事実から推測されたのが，たとえば「病者との性的接触によってうつる」というものであった（van Hasselaar 1835[2-2-9]）。そして，植民地にいる白人男性が黒人女性病者と性的接触を持ち，同病にかかり，自国に帰ってくる，すなわち自国に同病が持ち込まれることに対する恐怖が生じた。

治療法に関してだが，植民地の医師は入所者を対象にさまざまな治療法を試したようである。硫黄風呂や蒸気浴，薬草の煎じ液や搾り液の服用や塗布，さらにはホメオパシーや，重大な副作用を生じさせるおそれのある化学物質 [*3-5] の投与など。実験に近いことがなされた可能性も否定できないだろう。

3．病者の隔離と葬り

次に，収容所以外での病者の暮らしぶりについて見ていきたいと思うが，それに触れた文献はほとんどない。農園で奴隷がハンセン病になった場合，農園の奥まったところに置かれ，何らかの作業をさせられたようであるが，それ以上のことはわからない。またマルーンの集落で同病者が出た場合，どのような対応がなされたかも調べられていないようである。

さらに農園や収容所で，あるいはマルーンの集落で病者が亡くなった場合，どのような対応がとられたかに関しても，ほとんど文献はないようである。ほとんど唯一といってよいのが Herskovits & Herskovits（1934）で，彼らはスリナムのマルーン集落で，ハンセン病者が亡くなった場合，通夜は行われず，また亡骸は棺に納められず，呪術師が投棄される悪い森（bad bush）に埋められたことを聞き取っている。

アフリカでは，死が何種類かに分けられること [*3-6]，そしてハンセン病者の亡骸は通常とは異なるやり方で葬られることが知られている（若林 2018 参照）。こうした考え方や慣習がアフリカからカリブ海地域に運ばれたと推察されるが，十分な研究はなされていないようである。

ギアナ三国におけるハンセン病また同病者に関する考え方や慣習を，アフリカにおけるそれらと関連付けて検討すると，興味深い知見が得られるものと考えられる。

Ⅳ．ギアナ三国のハンセン病者を対象とした調査や研究

本来はここからが本稿が焦点を当てようとしていたことなのであるが，ハンセン病者を対象とした心理学的ないし精神医学的な調査や研究は，残念ながら，見当たらなかった。

例外的に，簡易病気認識調査用紙（Brief Illness Perception Questionnaire; B-IPQ）を用いて，スリナムのハンセン病治癒者（13 名）が自分の病をどのように捉えているか，それを調べたものはあった（van Haaren et al 2017[4-1]）。医療従事者にも，もし自分が同治癒者ならばどのように思うかを尋ね，実際の治癒者の認識と比較し，違いを示して

いるが，その解釈は困難である。なお同病治癒者は，同病の原因（B-IPQ の 9 番目の質問）として，病者が誕生する前に親が行った何らかの悪い行い，*treef* の動植物の摂食，そして遺伝と考えていることも示した。自分の悪行ではなく，親の悪行を原因と考えるというのは，興味深いことである。

先にも述べたように，ガイアナの Leprosy Control Clinic の所長 Morris-Wilson はハンセン病者の心理面にたびたび言及しているが，実証的な研究はなされていないようである。今後，病者，そして医学的には治癒したが後遺症のある者を対象とした調査や研究が望まれよう。

Ⅴ．ギアナ三国のハンセン病者および同治癒者以外の人びとを対象とした調査や研究

病者以外の人々を対象とした調査や研究は二つ――上述の van Haaren et al（2017）を含めると三つ――あった。一つは一般の人を対象としたもの，もう一つは医療従事者を対象としたものである。

まず Cook（1982）[5-1] は，1980 年にガイアナの都市部の住民 268 名と面接し，彼らがハンセン病を，他の六つの病気（性病，糖尿病，精神病，結核，マラリア，てんかん）と比較して，どのように見ているかを調べた。その結果同病をこれら七つの病気の中で「最も重大 serious な病気」「怖い病気」と考える者がそれぞれ 19% と 29% いることを示した。また,「決して治らない」と考える者は 60%（わからないは 7%）で ,「死に至ることが多い」と考える者は 32%（わからないは 22%）であることも見出した。要するに，深刻な病気だと見ているということであろう。ついで病者に対する拒否感に関しては，「同じ場所で働いてもよい」と考える者は 54%（「働きたくない」41%）いるのに対し,「自分の子どもが同病者と結婚してもよい」と考える者は 6%（「許さないだろう」80%）にすぎず，家族の一員とすることに強い拒否感を持っていることも見出した。さらに「ある特定の食物を食べると同病になる」「魔術 *obeah* をかけられると同病になる」といったように，伝統的ないしアフリカ由来の考え方をする者もいることを示した。

この Cook の調査から 20 年後の 2000 年に，アンケートを用いて医療従事者（看護学生 55 名，看護師 72 名，医師 16 名，そして事務員など非医療職員 42 名）における同病の知識や態度を調べたのが Briden & Maguire（2003）[5-2] である。彼らは医療従事者においても,「決して治らない」と考える者が少なくないこと（26%）を示した。Cook の結果と比べると減少しているようにも見えるが,「わからない」という者も 30% おり，確かなことは言えない。また病者への拒否感に関しては,「一緒に働いてもよい」という者は 76% で，Cook の結果と大きく異なっていた。ただし対象者も調査手法も Cook のそれと異なっており，経時的変化としてとらえることには慎重でなければならない。むしろ重要な知見は，医師や看護師や看護学生は非医療職の者よりハンセン病に関する知識を多く持っているが，病者に対する態度という点では両者に違いがなく，高知識は肯定的態度と直結しないというものであろう。ただしこれまで方々で認められてきたことではある。

総じて，病者のみならず，その家族，また医療従事者や一般の人々を対象とした心理社会研究や健康教育研究はほとんど行われておらず，今後の調査や研究が望まれると考えられた。

Ⅵ．結　語

南米ギニア三国においてハンセン病はどのように見られ，同病者はどのように扱われてきたのか，それに触れた文献を概観した。しかし総じて文献は乏しく，病者や同治癒者，またその家族や医療従事者の心理社会面や健康教育面に焦点を合わせた基礎的な調査や研究が進められるべきと考えられた。

またアフリカの考え方や慣習と比較して，ギアナ三国のそれらを調べると，興味深い知見が得られると考えられた。

【注】

*1-1）メキシコ湾周辺を含めないことが多いが，含めることもあり，厳密に定義された用語というわけでは必ずしもない。

*2-1）本当にクレオール語 *cocobay* に広い意味があるのか，もしそうだとして，トウィ語 *kokobé* 自体に広い意味があったのか，カリブ海地域で使われるようになってから広い意味を持つようになったのか，疑問は尽きない。立花（2009）[7-1] は，クレオール語の特徴の一つとして，一つの単語の意味する範囲が広くなることを挙げているが，参考になるかもしれない。

*2-2）うがった見方をすれば，大規模農園と囚人収容所とハンセン病者収容所，あるいは奴隷と囚人とハンセン病者，この三者には共通点があるとも言い得よう。

*2-3）西部アフリカで用いられる「赤い病気」の例をいくつか挙げておく。まずガーナで用いられるアカン語（Yankah 2009[7-2]）では *yare kokoo*（*yare* は病気，*kokoo* は赤い），ベナンで用いられるフォン語（Guedou 1985[7-3]）では *àzòn-vɔ̀*（*àzòn* は病気，*vɔ̀* は赤い），ニジェールで用いられるソンガイ・ジャルマ語（Jaffré 1999[7-4]）では *doori ciro*（*door* は病気，*ciro* は赤い），シエラレオネで用いられるリンバ語（Opala & Boillot 1996[7-5]）では *ntonang kipotheh*（*ntonang* は病気，*kipotheh* は赤い）という。またマリからコートジボアール北部にかけて用いられるセヌフォ語（Sindzingre & Zempléni 1981[7-6]）では *yaanyɛɛmɛ* というが，この語に関してはどこからどこまでが病気で，どこからどこまでが赤色かは不詳である。ついでに記すると，ソンガイ・ジャルマ語では，ハンセン病は *jiray taray* というが，婉曲に，*doori ciro* のほか，*samiya* や *kajiri beero*（*beero* は大きい），*curo beero*（大きい奴），*gaa wani*（分離の体），*cini haray doori*（夜の病気）などとも呼ばれるという（Jaffré 1999）。またマリなどで用いられるバンバラ語をはじめとするマンディング諸語では，ハンセン病は *banaba*（大きい病気；*bana* は病気，*ba* は大きい）という（Bailleul 1981[7-7]）。なお以上の例だが，ハンセン病以外の皮膚病も含まれているので注意していただきたい。

*2-4）たとえば Guérin（1886）[7-8] 参照。

*3-1）アンゴラのロアンゴを探検した Pechuël-Loesche（1907）[7-9] は，その土地の人が *tschīna* というタブーを持ち，それを侵すと病気になると考えていることを見出した。コンゴ語の辞書（Laman 1936[7-10]）によれば *ki-ina* にはタブーのほか皮膚病の意味もあるようで，サラマッカ語と似ている。

*3-2）ガーナやコンゴで相応しい例を見つけることができなかったが，たとえば，ジンバブエのショナ人は，そうした動物を食べると歯がなくなったり，ハンセン病（*maperembudzi*）になったりすると考えているという（Pongweni 1996[7-11]）。あるいはカランガ人も歯をすべて失ったり，病気になったりすると考えているという（Clemence & Chimininge 2015[7-12]）。

*3-3）Anderson（2005）[7-13] によれば，セント・キッツ島で *cocobay* を生じさせるトカゲのことを *cocobay lizard* というらしい。挿絵を見るとグリーンアーノルの可能性がある。またジャマイカではヒキガエルの皮膚から分泌され，触れると皮膚病を来す分泌液も *cocobey* と呼ばれたようである（Cassidy & Le Page 1980[2-1-1]）。

*3-4）カリブ海地域で最初にハンセン病が現れたのがいつか確かではないが，1687 年にジャマイカに来た Slone（1707）[7-14] は同病者を見かけ，同病について記している。また 1736 年にバルバドスに来た Hughes（1750）[7-15] は「同病はここで約 60 年前に最初に現れ，この 20 年の間に非常に広まった」と記している。両記述をもとにすれば，遅くとも 1690 年ごろと考えられよう。なお，コロンビアを探検しボゴタを作ったスペイン人 Gonzalo Jimenez de Quesada はハンセン病にかかり，1579 年に死亡したとされる（Graham 1922[7-16]）。ただし，いずれも本当にハンセン病であったのか，何とも言えない。

*3-5）たとえば，Beauperthuy は（現）ガイアナの Kaow 島居留地で過塩素酸水銀（Wilson 1871[7-17]）を用いた治療を，また Clarke は（現）ドミニカ国で砒素酸（Caton 1809[7-18]）を用いた治療を試みたという。ただし，いずれも詳しいことはわからない。

*3-6）たとえば，ナイジェリアのイボ人は，死を，自然な（godly）死（*onwu chi*），予期せぬ突然の死（*onwu ike*），自然でない（ungoldly）死（*ajo onwu ma obu onwu ojoo*）に分け，最後のものの

例としてハンセン病による死や自殺死があると考えている（Echema 2010[7-19]）。あるいはガーナのアカン人は，老齢や病気（ハンセン病を除く）による自然な（natural）死（*abɔdwowuo*），戦いなどによる名誉な死（*nsramwuo*），子どものいない人の死（*anwobawuo*），自殺による死（*atɔfowuo*），子どもの死そして妊婦の出産時の死（*amumuwuo*）に分けているという（Warren 1973[7-20]）。

【文献】

1-1. 若林佳史（2013）中国におけるハンセン病に関する心理社会研究と健康教育研究：文献綜述.『社会情報学研究』（大妻女子大学紀要 . 社会情報系），22: 73–105.

1-2. 若林佳史（2014）南アジアにおけるハンセン病に関する心理社会研究と健康教育研究：文献綜述.『社会情報学研究』（大妻女子大学紀要 . 社会情報系），23: 77–120.

1-3. 若林佳史（2016）東アフリカにおけるハンセン病に関する心理社会研究と健康教育研究：文献綜述.『社会情報学研究』（大妻女子大学紀要 . 社会情報系），25: 31–48.

1-4. 若林佳史（2017）西部アフリカにおけるハンセン病に関する心理社会研究と健康教育研究：文献綜述.『社会情報学研究』（大妻女子大学紀要 . 社会情報系），26: 35–58.

1-5. 若林佳史（2018）中部アフリカおよび南部アフリカにおけるハンセン病に関する心理社会研究と健康教育研究：文献綜述.『社会情報学研究』（大妻女子大学紀要 . 社会情報系），27: 13–37.

1-6. 若林佳史（2019）北部アフリカにおけるハンセン病の捉えられ方と同病者の扱われ方：文献綜述.『社会情報学研究』（大妻女子大学紀要 . 社会情報系），28: 47–61.

1-7. UNEP (2006) *National Programmes of Action for the Protection of the Coastal and Marine Environment from Land-based Sources of Pollution: The Caribbean Experience*. CEP Technical Report No. 46. UNEP Caribbean Environment Programme.

2-1-1. Cassidy FG, Le Page RB (1980) *Dictionary of Jamaican English*. 2nd ed. Cambridge University Press.

2-1-2. Valls L (1981) *What a pistarckle! A dictionary of Virgin Islands English creole*. L. Valls.

2-1-3. Allsopp R (1996) *Dictionary of Caribbean English Usage*. Oxford University Press.

2-1-4. Winer L (2009) *Dictionary of the English / Creole of Trinidad & Tobago: On historical Principles*. McGill-Queen's University Press.

2-1-5. Smith N (2015) Ingredient X: the shared African lexical element in the English-lexifier Atlantic Creoles, and the theory of rapid creolization. Muysken P, Smith N (eds) *Surviving the middle passage: The West Africa – Surinam Sprachbund*. De Gruyter Mouton, pp.67–106.

2-1-6. Klingmüller KGV (1930) *Die Lepra*. Springer-Verlag.

2-1-7. Payne-Jackson A, Alleyne MC (2004) *Jamaican folk medicine: A source of healing*. University of the West Indies Press.

2-1-8. Grainger J (1802) *An essay on the more common West-India diseases; and the remedies which that country itself produces: To which are added, some hints on the management, &c. of Negroes*. 2nd ed. Mundell & Son, and Longman & Rees.

2-1-9. Royal College of Physicians of London (1867) *Report on leprosy by the Royal College of Physicians, prepared for Her Majesty's Secretary of State for the Colonies; with an appendix*. Eyre and Spottiswoode.

2-1-10. Milroy G (1873) *Report on leprosy and yaws in the West Indies*. William Clowes & Sons.

2-1-11. Hillis JD (1881) *Leprosy in British Guiana: An account of West Indian leprosy*. J. & A. Churchill.

2-1-12. Tebb W (1893) *The recrudescence of leprosy and its causation*. Sonnenschein.

2-1-13. Abraham PS (1897) Remarks on leprosy in the British Empire. *British Medical Journal*, 2: 1409–1414.

2-1-14. Vintras L (1898) The leper hospitals of the West Indies. *Hospital*, 24(617): 292–293.

2-1-15. Neal FA (1900) A sketch of the leper asylums, British Guiana. *Journal of Tropical Medicine*, 3: 227–231.

2-1-16. Moulton H (1901) Leprosy in British, Dutch, and French Guiana. *Annual Report of the Supervising Surgeon-General of the Marine-Hospital Service of the United States for the Fiscal Year 1899*. Government Printing Office, pp.430–432.

2-1-17. Araujo S (1924) Fréquence et prophylaxie de la lèpre dans les Guyanes et a la Trinité. *IIIe Conférence Internationale de la Lèpre (Strasbourg - 28 au 31 juillet 1923) Communications et débats.* Librairie J.-H. Baillière et Fils. pp.400–436.

2-1-18. Rose FG (1929) Leprosy work in British Guiana. *Lep Note*, n4: 17–19.

2-1-19. Rose FG (1931) The leprosy problem in British Guiana. *Lep Rev*, 2(2): 55–58.

2-1-20. Rose FG (1933) Five years of leprosy work in British Guiana. *Lep Rev*, 4(1): 4–13.

2-1-21. Muir E (1942) Report of leprosy in British Guiana. *Lep Rev*, 13(2): 22–31.

2-1-22. Nicholas GJ (1955) Leprosy in British Guiana, 1954. *Lep Rev*, 26(4): 156–162.

2-1-23. Rose P (1989) Changes in epidemiological indices following the introduction of WHO MDT into the Guyana leprosy control programme. *Lep Rev*, 60(2): 151–156.

2-1-24. Alexander H, Persaud R (1997) Leprosy in Guyana, 1990–95: Lepra Elective Study. *Lep Rev*, 68(1): 83–89.

2-1-25. Gampat R (2015) *Guyana: From Slavery to the Present: Vol. 2. Major Diseases*. Xlibris, pp.623–648.

2-1-26. Menezes MN (2011) The Mahaica Hospital story. *Stabroek News*, Sunday, February 6, 2011.

2-2-1. Menke H, Pieters T, Reyme M, Menke J (2019) *De tenen van de leguaan. Verhalen unit de wereld van Surinaamse leprapatienten. Over lepra, slavernij, kolonialisme en de Surinaamse ecologie*. Stichting LM Publishers.

2-2-2. Wilner J (2007) *Wortubuku fu Sranan Tongo. Sranan Tongo – English dictionary*. Fifth ed. SIL International.

2-2-3. Smith N (2015) A preliminary list of probable Kikongo (KiKoongo) lexical items in the Surinam Creoles. Muysken P, Smith N (eds) *Surviving the middle passage: The West Africa – Surinam Sprachbund*. De Gruyter Mouton, pp.417–462.

2-2-4. Snelders S (2017) *Leprosy and colonialism: Suriname under Dutch rule*, 1750–1950. Manchester University Press.

2-2-5. Wekker G (2006) *The politics of passion: Women's sexual culture in the Afro-Surinamese diaspora*. Columbia University Press.

2-2-6. Schilling GW (1771) *Verhandeling over de melaatsheid*. J. C. ten Bosch.

2-2-7. Stedman JG (1988) *Narrative of a five years' expedition against the revolted Negroes of Surinam*. (Transcribed for the first time from the original 1790 manuscript. edited by Price R and Price S). Johns Hopkins University Press.

2-2-8. Kühn FA (1828) Over de elephantiasis te Suriname. *Hippocrates*, 7: 12–28.

2-2-9. van Hasselaar A (1835) *Beschrijving der in de kolonie Suriname voorkomende élephantiasis en lépra (melaatschheid)*. S. de Greber.

2-2-10. Drognat-Landré CL (1869) *De la contagion, seule cause de la propagation de la lèpre*. Guillaume Baillière.

2-2-11. Lens T (1895) Lepra in Suriname. *Elsevier's Geïllustreerd Maandschrift*, 10: 521–552.

2-2-12. Cohen R (1991) *Jews in another environment: Surinam in the second half of the eighteenth century*. Brill.

2-2-13. Ten Hove O (2003) 19e eeuws bevolkingsonderzoek naar lepra in Suriname. *OSO*, 22: 34–49.

2-2-14. Menke HE, Wille RJ, Faber WR, Pieters T (2007) Bijdragen van Nederland en zijn koloniën aan de kennis over de oorzaak van lepra in de negentiende eeuw. *Ned Tijdschr Geneeskd*, 151(14): 825–830.

2-2-15. Menke H, Snelders S, Pieters T (2009) Omgang met lepra in 'de West' in de negentiende eeuw. Tegendraadse maar betekenisvolle geluiden vanuit Suriname. *Studium* (Rotterdam), 2(2): 65–77.

2-2-16. Menke HE, Faber WR, Pieters T (2010) Charles Louis Drognat Landré and Gerhard Henrik Armauer Hansen; Contribution from a Dutch colony to the discovery of the leprosy bacterium. *Lepr Rev*, 81(1): 82–86.

2-2-17. Menke H, Snelders S, Pieters T (2011) Leprosy control and contagionism in Suriname. *Academic Journal of Suriname*, 2: 168–175.

2-2-18. Snelders S (2013) Leprosy and slavery in Suriname: Godfried Schilling and the framing of a racial pathology in the eighteenth century. *Social History of Medicine*, 26(3): 432–450.

2-2-19. Menke H (2015) Machtsverhoudingen in een Surinaamse Leprozerie; reflecties naar de

aanleiding van de Martha Stern fotocollectie. *Academic Journal of Suriname*, 6: 561–573.

2-2-20. Jagdew E, Vernooij J (2017) Peerke Donders en Batavia. Een historiografisch overzicht, 1842–2016. *Academic Journal of Suriname*, 8: 733–754.

2-2-21. Vernooij J (2017) Lepra en katholieke kerk in Suriname (19e eeuw). *Academic Journal of Suriname*, 8: 762–770.

2-2-22. Snelders S, van Bergen L, Huisman F (2019) Leprosy and the colonial gaze: Comparing the Dutch West and East Indies, 1750–1950. *Social History of Medicine*, hkz079. 〈https://doi.org/10.1093/shm/hkz079〉

2-2-23. Menke H, Pieters T, Menke J (2020) How colonial power, colonized people, and nature shaped hansen's disease settlements in Suriname. *Societies*, 10(2): 32. 〈https://doi.org/10.3390/soc10020032〉

2-2-24. Spapens P, Stads J (2012) *Gwasi siki: Levensverhalen van Surinaamse mensen die lepra hebben gehad*. Pix4Prof Uitgeverij.

2-3-1. Société Royale de Médecine (1785) *Rapport des commissaires de la société royale de médecine sur le mal rouge de Cayenne, ou l'éléphantiasis*. Imprimerie Royale.

2-3-2. Verschhr G (1894) *Voyage aux Trois Guyanes et aux Antilles*. Hachette.

2-3-3. Kermorgant A (1905) Notes sur la lèpre dans nos diverses possessions coloniales. *Annales d'Hygiène et de Médecine Coloniales*, 8: 25–67.

2-3-4. Jeanselme MM, Tissier (1908) Histoire des léproseries à la Guyane. *Revue de Médecine et d'Hygiène Tropicales*, 5: 79–92.

2-3-5. Thézé J (1916) Pathologie de la Guyane française. (Lèpre, Filariose, etc.). Rapport sur les Travaux de l'Institut d'Hygiène et de Bactériologie 1914–1915. V. La lèpre. *Bulletin de la Société de pathologie exotique,* 9(7): 449–464.

2-3-6. Floch H (1951) La lèpre au bagne Guyanais: Son evolution durant un siècle (1852-1950), ses particularités. *Int J Lepr*, 19(3): 283–295.

2-3-7. Marie-Odile et Phillippe (2015) Ancienne léproserie de l'Acarouany près de Mana (Guyane). 〈http://delaunay-kourou.over-blog.com/2015/07/ancienne-leproserie-de-l-acarouany-pres-de-mana-guyane.html〉

2-3-8. Fougere E (2018) *Les îles malades: Léproseries et lazarets de Nouvelle-Calédonie, Guyane et Guadeloupe*. Garnier.

2-3-9. Reclus E (1895) *The earth and its inhabitants. South America*. v. II. Appleton, p.63.

3-1-1. Herskovits MJ (1931) On the provenience of the Portuguese in Saramacca tongo. *West-Indische Gids,* 12(1): 545–557.

3-1-2. Herskovits MJ, Herskovits FS (1934) *Rebel destiny; among the Bush Negroes of Dutch Guiana*. Whittlesey House, McGraw-Hill Book.

3-1-3. Smith RT (1956) *The negro family in British Guiana: Family structure and social status in the villages*. Routledge & Kegan Paul.

3-1-4. Herskovits MJ, Herskovits FS (1936) *Surinam folk-lore*. Columbia University Press.

3-1-5. Lampe PHJ (1929) Het Surinaamsche Treefgeloof; Een volksgeloof, betreffende het ontstaan van de melaatschheid. *West-Indische Gids*, 10(1): 545–568.

3-1-6. Kiple KF (1984) *The Caribbean slave: A biological history*. Cambridge University Press.

3-1-7. Sheridan RB (1985) *Doctors and slaves: A medical and demographic history of slavery in the British West Indies, 1680–1834*. Cambridge University Press.

3-1-8. Handler JS, Jacoby JA (1993) Slave medicine and plant use in Barbados. *Journal of Barbados Museum and Historical Society*, 41: 74–98.

3-1-9. Kiple KF, Ornelas KC (1996) Race, war and tropical medicine in the eighteenth-century Caribbean. Arnold D (ed) *Warm climates and western medicine: The emergence of tropical medicine, 1500–1900.* (*Clio Medica,* 35). Rodopi, pp.65–79.

3-1-10. Handler JS (2000) Slave medicine and Obeah in Barbados, circa 1650 to 1834. *Nieuwe West-Indische Gids*, 74(1/2): 57–90.

3-1-11. Bilby KM, Handler JS (2004) Obeah: Healing and protection in West Indian slave life. *Journal of Caribbean History*, 38(2): 153–183.

3-1-12. Handler JS (2006) Diseases and medical disabilities of enslaved Barbadians, from the seventeenth century to around 1838, Part I.

Journal of Caribbean History, 40: 1–38.

3-1-13. De Barros J (2004) 'Setting things right': Medicine and magic in British Guiana, 1803–38. *Slavery & Abolition*, 25(1): 28–50.

3-1-14. Groenendijk S (2006) *Winti practices in Bigiston, Suriname: A closer look at bonuman Ruben Mawdo.* Utrecht University.

3-1-15. Davis NZ (2016) Physicians, healers, and their remedies in colonial Suriname. *Canadian Bulletin of Medical History,* 33(1): 3–34.

3-1-16. Schiebinger L (2017) *Secret cures of slaves: People, plants, and medicine in the eighteenth-century Atlantic world.* Stanford University Press.

3-1-17. Senior E (2018) *The Caribbean and the medical imagination, 1764–1834: Slavery, disease and colonial modernity.* Cambridge University Press.

3-1-18. Grainger J (1764) *An essay on the more common West-India diseases; and the remedies which that country itself produces: To which are added, some hints on the management, &c. of Negroes.* T. Becket and P.A. De Hondt.

3-1-19. Collins D (1803) *Practical Rules for the Management and Medical Treatment of Negro Slaves in the Sugar Colonies.* J. Barfield.

3-1-20. Roberts J (2013) *Slavery and the Enlightenment in the British Atlantic, 1750–1807*. Cambridge University Press

4-1. van Haaren MA, Reyme M, Lawrence M, Menke J, Kaptein AA (2017) Illness perceptions of leprosy-cured individuals in Surinam with residual disfigurements – "I am cured, but still I am ill". *Chronic Illn*, 13(2): 117–127.

5-1. Cook A (1982) An Urban community's thoughts about leprosy: A survey in Guyana. *Lep Rev*, 53(4): 285–296.

5-2. Briden A, Maguire E (2003) An assessment of knowledge and attitudes towards amongst leprosy / Hansen's disease workers in Guyana. *Lepr Rev*, 74(2): 154–162.

7-1. 立花英裕（2009）カリブ海のフランス語圏クレオール文化．畑恵子・山崎眞治（編）『ラテンアメリカ世界のことばと文化』成文堂，pp. 215–229

7-2. Yankah K (2009) The Cultural Foundations of Disability: An Ethno-Communication Approach. *CDD –Ghana Briefing Papers*, 9(4): 1–5.

7-3. Guedou GAG (1985) *Xó et gbè, langage et culture chez les Fon (Bénin)*. Peeters Publishers.

7-4. Jaffré Y (1999) Des maladies sur et sous la peau. Jaffré Y, Olivier de Sardan JP (eds) *La construction sociale des maladies: Les entités nosologiques populaires en Afrique de l'Ouest*. Presses universitaires de France. pp. 321–337.

7-5. Opala J, Boillot F (1996) Leprosy among the Limba: Illness and healing in the context of world view. *Soc Sci Med*, 42(1): 3–19.

7-6. Sindzingre N, Zempléni A (1981) Modèles et pragmatique, activation et répétition: réflexions sur la causalité de la maladie chez les Senoufo de Côte d'Ivoire. *Soc. Sci. Med*, 15B(3): 279–293.

7-7. Bailleul C (1981) *Petit dictionnaire Bambara - Français, Français - Bambara*. Avebury.

7-8. Guérin JHP (1886) *De la fièvre jaune à la Guyane française (1763 - 1886) (Historique - Statistique - Etiologie)*. Imprimerie du centre.

7-9. Pechuël-Loesche E (1907) *Volkskunde von Loango*. Strecker & Schröder.

7-10. Laman KE (1936) *Dictionnaire Kikongo–Français*. Institut Royale Colonial Belge.

7-11. Pongweni AJC (1996) *Shona praise poetry as role negotiation: The battles of the clans and the sexes*. Mambo Press.

7-12. Clemence M, Chimininge DRV (2015) Totem, taboos and sacred places: An analysis of Karanga people's environmental conservation and management practices. *International Journal of Humanities and Social Science Invention,* 4(11): 7–12.

7-13. Anderson NR (2005) *'It's not catching': Hansen Home and the local knowledge of leprosy in the Federation of St. Kitts and Nevis, West Indies.* Master's Thesis, University of Tennessee. 〈https://trace.tennessee.edu/utk_gradthes/580〉

7-14. Sloane H (1707) *A Voyage to the Islands Madera, Barbados, Nievas, S. Christophers and Jamaica, with the Natural history of the herbs and treees, four-footed beastes, fishes, birds, insects, reptiles, &c. a ... of Those Islands.* B.M.

7-15. Hughes G (1750) *The Natural history of Barbados, in ten books.* Arno Press.

7-16. Graham RBC (1922) *The conquest of New Granada, being the life of Gonzalo Jimenez de Quesada.* William Heinemann.
7-17. Wilson E (1871) The Beauperthuy treatment of leprosy. *Br Med J*, 1 (538): 434.
7-18. Caton TM (1809) Communication on cutaneous diseases. *London Medical and Surgical Spectator*, 2(8): 234–235.
7-19. Echema A (2010) *Igbo funeral rites today: Anthropological and theological perspectives.* LIT Verlag Münster.
7-20. Warren DM (1973) *The Akan of Ghana: An overview of the ethnographic literature.* Pointer Limited.

Leprosy-affected persons in the Three Guianas: A literature review

YOSHIFUMI WAKABAYASHI
School of Social Information Studies, Otsuma Women's University

Abstract

I carried out a literature review as to how leprosy has been viewed and how the leprosy-affected persons have been dealt with in the Three Guianas. It is found out that the literature concerned are very scarce. So it is considered that the basic psychosocial research and health education research targeting the affected persons, their families, and medical and health care workers involved with them are needed.

Key Words（キーワード）
Leprosy（ハンセン病），Hansen's disease（ハンセン病），Leprosarium（ハンセン病療養所），Three Guianas（ギアナ三国），Guyana（ガイアナ），Suriname（スリナム），French Guiana（フランス領ギアナ），Literature review（文献綜述）